

『ブラス！』

1996年／イギリス／マーク・ハーマン監督作品

困難な社会状況の中でも 人間らしく生きようとする人々の「底力」

会員 中川 重徳 (40期)

舞台はイングランド北部の炭鉱の町「グリムリー」。経営者が打ち出した閉山方針をめぐって町全体が揺れる中、100年の伝統を誇るヤマの男たちのブラスバンド「グリムリー・コリアリー・バンド」の活動も危機に直面している。バンドの指導者ダニーは、音楽こそ人々に生きる勇気と希望を与えると信じ、ブラスバンドの全国大会をめざして情熱を傾けるが、メンバーの中には、妻たちにバンドからの脱退を約束させられている者もいる。そんな時、この町出身のグロリアという若い女性が町に戻ってきてバンドに加わり、メンバーたちは俄然発憤するが…（続きは是非、劇場やDVDで）。

この映画、イギリス社会、イギリスの人々の底力を感じさせる映画だ。イギリスには、全国に「町のバンド」「職場のバンド」があり、この映画もグライムソープという炭鉱の實在の炭鉱夫バンドがモデル（www.grimethorpeband.com）。ストーリーも同炭鉱が1992年に閉山されバンドの存続が危機に瀕する中で全国大会出場を果たした実話に基づく。舞台設定

はシリアスで、経営側と労働者の対立が描かれ、主人公の一人は、ストライキに参加して借金を背負い、"payday is payday! (約束は約束だ)" とすごむ金貸しにこづきまわされ家財道具一切を持ち去られるといった場面も登場する。それでも、この映画が魅力的なのは、アランフェス協奏曲、「威風堂々」など全編に流れる上記実在バンドの迫力ある演奏と、一人一人の人間に対する暖かい目とユーモアだ。心ならずもバンド脱退を決意した中年二人組が、「炭鉱で60年、怖いものは何も無いが、ダニーを裏切るなんて…」 「ああ、俺たちは最低の野郎だ」と言いあいながら稽古場に行ったものの、そこにグロリアが現れ入団することになった途端、「脱退はとりやめ」となる場面など何度見てもおかしい。似たような状況設定の「フル・モンティ」という映画もあったが、困難な社会状況の中でも人間らしく生きようとする人々がいて、それをすてきな映画に仕上げる人たちがいる。その「底力」が魅力で何回も見てしまう。